

|             |                                 |
|-------------|---------------------------------|
| 氏 名         | さ さ き たかし<br>佐 々 木 崇            |
| 学位(専攻分野)    | 博 士 (文 学)                       |
| 学 位 記 番 号   | 文 博 第 380 号                     |
| 学位授与の日付     | 平 成 19 年 1 月 23 日               |
| 学位授与の要件     | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当         |
| 研 究 科 ・ 専 攻 | 文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻         |
| 学 位 論 文 題 目 | 認 識 論 に お け る 可 謬 主 義 と 自 然 主 義 |

|        |                      |             |             |
|--------|----------------------|-------------|-------------|
| 論文調査委員 | (主 査)<br>教 授 伊 藤 邦 武 | 教 授 小 林 道 夫 | 助教授 出 口 康 夫 |
|--------|----------------------|-------------|-------------|

## 論 文 内 容 の 要 旨

近代の哲学的認識論は一般に、合理主義と経験主義という二つの立場に大きく分類されることが多いが、それらは実際にはいずれも「基礎づけ主義」という共通の試みとして特徴づけられるべきものである。基礎づけ主義的な認識論の中心的な主題は、我々の信念に基礎を与えることによって、その絶対的な確実性を正当化することである。この種の認識論の試みにとって重要な課題は、我々の信念の確実性とその信念の保持を否定する懐疑論を論駁することである。そして、懐疑論を論駁するために、認識論は、科学に代表される経験的な探究とは身分を異にすること、すなわち、科学によってもたらされる信念に依拠するという循環を回避することが要求される。19世紀後半以降の哲学においては、こうした基礎づけ主義の試みに対して様々な批判がなされてきたが、経験主義の立場を維持しつつ、基礎づけ主義に代わる立場を主張するものの一つとして本論が検討の対象とするのが、認識論に関する可謬主義である。可謬主義の基本的な主張は、我々の信念が絶対的な確実性を持つことを否定し、常に改訂の可能性を持つことを肯定するということである。

「認識論における可謬主義と自然主義」という表題のもとで本論が取り組む問いは、次のような問いである。すなわち、我々の信念が絶対的な確実性を持つことを否定し、常に改訂の可能性を持つことを肯定する可謬主義は、必然的に科学から独立した哲学的議論を否定する自然主義を導くのだろうか。言い換えれば、可謬主義の主張に立脚しながら、自然主義とは異なる哲学的議論を追及することが可能であるとすれば、それはどのような特徴を持つのであろうか。本論では、この問いに取り組む一つの手がかりとして、可謬主義の立場を最も明確に打ち出したパースの議論と、現代の自然主義の重要な背景を形成したクワインの議論を取り上げる。

この両者を取り上げるのは、我々が問題にする認識論における可謬主義と自然主義の関係について、両者の主張は類似する側面と対照的な側面の両方を判明な形で示しているからである。この基礎づけ主義的な認識論の問題に関して、パースとクワインは、それぞれの認識論を展開する出発点として、極めて類似した議論を提示している。すなわち、両者は共に、デカルトの方法的懐疑の可能性と意義に対して類似した論拠によって批判を行い、さらにそれと関連した形で、デカルトの提示した基礎づけ主義的な認識論に対する批判を行う。つまり両者は、同様の論拠によって、我々の信念の絶対的な確実性を正当化しようとする基礎づけ主義的な認識論を批判し、我々の信念が絶対的な確実性を持つことを否定し、常に改訂の可能性を持つことを肯定する可謬主義の立場を認識論に関する基本的な出発点として共有する。

ところが、類似した形で示された基礎づけ主義に対する批判を経て提示される認識論的代案において、両者の議論は著しい対照を示す。クワインは、基礎づけ主義的な認識論の失敗から得られる教訓として、伝統的な認識論の課題と方法の根本的な刷新を提案する。すなわち、我々の信念の絶対的な確実性を正当化する試みとしてではなく、科学から独立した特権的な身分を放棄し、科学の成果と方法を循環を恐れることなく活用した経験的な探究としての自然化された認識論が提案される。伝統的な基礎づけ主義にとって重要な意義を有した懐疑論の論駁という課題は、正面から追求されることなく、むしろ懐疑論の認識論における意義を消極的に評価することによって解消される。つまり、懐疑論は科学の成果を前提にして立てられ

た議論であるとされ、科学の成果を用いるという循環を回避した形で論駁されるべき問題とは見なされない。そしてクワインは、このようにして循環を恐れることなく科学の成果を認識論において活用できるという点を、自然主義を選択することの重要な利点として強調する。

それに対してパースは、こうした自然主義の立場に対して、否定的な態度を示す。科学の成果を哲学的議論に反映させるという自然主義の利点と意義を明確に自覚しながらも、彼は自然主義を選択することを拒否し、科学から独立した身分を持ち、循環を回避することで成立する哲学的認識論を擁護し、各時期の議論の発展に即して、こうした認識論を追及した。そして、このパースの微妙な態度は、懐疑論に関する彼の議論の中にも見て取ることができる。一方で前期のパースは、デカルトの普遍的懐疑について、それが不可能であり自己欺瞞であると主張する。懐疑はあくまでも探究を促進する範囲でのみ意味をもつというこの主張は、懐疑が科学的懐疑であるというクワインの主張と重なるものであろう。しかし、他方で、後期のパースの議論の展開においては、このデカルトの普遍的懐疑に対する再評価が行われる。そしてその再評価においては、単に当面の探究を促進するという役割だけではなく、循環を回避した哲学的認識論の試みとも密接に関連する意義が、懐疑に対して与えられることになる。

本論の各章の概要は、以下のとおりである。まず、第1章では、クワインの初期の認識論の全体論から自然化された認識論に至る議論を概観する。第2章では、本論の主題に関連する範囲で、パースの可謬主義的認識論の議論を概観する。そうした予備的検討を踏まえて、続く第3章では、クワインが、『ことばと対象』や論文「経験主義におけるプラグマティズムの位置」において、パースの議論に対して行っている批判の内容を詳しく検討し、そこで挙げられている論点を確認するとともに、批判の妥当性を検討する。その上で、クワインとパースの対立点を考察する上で重要であると見なされる論点を三つに絞り、その論点に関する両者の見解を検討しながら、その検討から取り出せる問題を考察する。そこで取り出される問題は、次の三つである。すなわち、第一の問題は、真理と実在に関する両者の対立である。第二の問題は、哲学的反省の位置づけに関する両者の対立である。そして第三の問題は、常識的信念と科学的信念の関係に関する両者の対立である。

それに続く三つの章では、上に取り出された三つの問題に関して、その問題と関連する他の哲学者の議論にも触れながら、それぞれ考察する。

第4章では、第一の問題の検討を通じて、次のような結論が得られる。すなわち、特に真理の引用解除説に関して、一見すると共通の見解を持つかのように見えた両者は、その主張が提出される議論の過程を検討することによって、基本的に異なる見解を持っている事が明らかになる。クワインは、彼の認識論の全体論を論拠にして、真理の引用解除説と措定物としての実在という見解を持ち、同じく全体論からの帰結とされる自然主義的認識論の循環を肯定するという特徴を強調する形で、「頑固な実在論」という主張を行う。それに対してパースは、探究者が科学の方法を意志的に選択することを正当化する理由を与えるという意図の下に、真理と実在に関する実質的な理解を要求する。このように真理と実在に関する両者の対立を検討することで、次のような両者の対立が明らかになる。すなわち、クワインは、「前提としての科学」という見解の下で、認識論に関して循環を肯定する主張を行う。他方、パースは、「選択可能なものとしての科学」という見解の下で、循環を回避する認識論の正当化を追及する。両者の真理と実在に関する見解の対立は、こうした認識論における循環の問題に関する対立に集約される。

第5章では、この問題を、先の第二の問題でもある、認識論における哲学的反省の位置づけに関する両者の見解の対立の問題として検討する。そこで両者の立場の対立を認識的な規範の問題に関して、クワインは説明的正当化で答え、パースは説得的正当化を求めるという対立として整理する。その上で、クワインに対するストラウドの批判とクワインの応答を検討し、次のようにその見解を要約する。クワインは、科学全体に対する懐疑論を否定し、伝統的な認識論の根本問題を否定し、代わりに三人称的視座からの循環を肯定した研究に集中する。このようにしてクワインの自然主義的認識論は、説明的正当化による理解を追及するのであり、それがクワインによる哲学的反省の位置づけである。他方、パースは、初期の議論から一貫して説得的正当化を求め、それを自らの哲学的反省の基本とする。つまり、少なくとも科学に対する懐疑論に対して、それを頭ごなしに却下することなく、説得的正当化によって答えようとする。特にその集大成は、初期の心理学的事実に依拠した説明を撤回する後期のプラグマティズムの証明の試みに現れており、そこでは規範学や批判的常識主義に依拠した説得的正当化を試みている。ところがパースは、同時に超越論的反省の立場を拒否し、自然主義に対する非超越論的かつ可謬

主義的代案を模索する。これがパースの追及した哲学的反省の位置づけである。

第6章では、パースの哲学的な企図である、自然主義に対する非超越論的かつ可謬主義的代案としての説得的正当化がいかにして可能かという問題を、先の第三の問題でもある、常識的信念と科学的信念の関係についての両者の見解の対立の検討を通じて考察する。そして、パースの批判的常識主義が、彼の説得的正当化にとって難点になると考えられる無限後退の問題に対処するための一つの方策を提供するものであることを見る。また同時に、批判的常識主義の中で主張されているパースの見解から、科学的探究全体及び科学的探究行為そのものに関する両者の特徴づけの対立を理解するための論点が得られる。

そして最後に、結論において、本論の検討全体をとおして明らかになった諸点を踏まえて、可謬主義に立脚しながらも、認識論における自然主義に関して、互いに相容れない立場を採るクワインとパースの対立点を総括し、パースの追及した可謬主義的かつ反自然主義的な認識論の可能性が評価される。それは可謬主義に立脚しつつ、科学的探究の成立の条件についてより現実的な前提を組み込んだ認識のモデルとして、より妥当な理論という評価を得るのである。

## 論文審査の結果の要旨

本論の表題は「認識論における可謬主義と自然主義」であるが、本論の内容をより厳密に言えば、「認識論における可謬主義内部での、自然主義と反自然主義の対立の比較検討」ともいうべきものである。認識論における可謬主義とは、われわれのすべての認識にかんして、その絶対的な確実性を否定し、あらゆる認識が常に改訂される可能性をもつことを主張する立場である。この立場は、ある特定の認識が不可謬であり、他のすべての認識の基礎となるという、近代以来の哲学の基本的な立場、すなわち認識論における「基礎づけ主義」と対立する。一方、認識論における自然主義とは、人間の認識活動を自然現象の一つと考え、それについての哲学的反省もまた自然科学的探究の一部門であると考ええる立場であり、哲学を科学へと還元する立場である。そしてこれに反対する反自然主義とは、人間の認識にかんする哲学的反省は自然科学的探求とは独立の営みであると解する立場である。

本論は可謬主義内部での自然主義と反自然主義の対立を、ウィラード・クワインとチャールズ・パースという二人の哲学者の理論的対立によって代表させ、二つの理論の共通点と相違点を洗い出し、相違点の由来を突き止めるとともに、それぞれの長所と短所とを分析する。そして、本論は最終的に、二つの立場の比較考量的後に、可謬主義に立ちながらも自然主義を批判するパースの立場に、認識論の今日的な状況からみて、より積極的な評価が下されるべきであると論じる。パースは19世紀後半から20世紀前半のアメリカの哲学者であり、クワインは20世紀後半のアメリカを代表する哲学者である。そしてクワインの理論の輪郭はパースの批判を通じてシャープなものになった側面があるのであるが、本論ではクワインによるパース批判が必ずしも妥当ではないという観点から、むしろ時代的にはより以前の理論であるパース的な視点の復活を求めようとするのである。

以上のようなテーマと趣旨にもとづく本論の基本的問題意識は、今日の認識論のおかれた状況に照らしてきわめて妥当なものと考えられる。この間の百年ほどの認識論の歴史を概観してみると、認識論の基礎づけ主義的な伝統については、19世紀以来さまざまな批判が提出されてきたといえる。たしかに、フッサールの現象学やカルナップの論理実証主義など、20世紀前半の認識論においては、種々の論理的道具立てのもとで、デカルト以来の近代の哲学の中心課題である知識の基礎づけというプログラムの復活が図られたが、この企てはいずれも失敗に終わったことが、20世紀後半の言語論、メタ認識論などによって明らかにされた。その結果としてすべての認識が原則的に誤謬の可能性をもち、改訂の必要に迫られる可能性をもつという原理が確立されてきた。クワインの自然主義的哲学はこうした反基礎づけ主義の認識論、すなわち可謬主義に立つ認識論の趨勢の頂点に位置するもっとも強力かつ独創的な理論として、第二次大戦後の世界の哲学において中心的役割を果たしてきた。ところが、この理論にたいしても、そのいくつかの前提が疑われるとともに、特にその自然主義的プログラムの有効性や妥当性について多くの疑問が提出されることになった。そこで近年の認識論の中心的課題は、自然主義の妥当性をめぐる批判的検討へと重心が移動し、クワイン流の立場にたいしていかなる批判が有効であるのかという問題が問われてきた。本論はこの関心のもとで、パースによる可謬主義の先駆形態のほうに、より妥当な理論的練り上げが見られるという回答を与えるのであるが、その議論はクワイン、パース双方の理論についての行き届いた分析を踏まえ、両者の長所短所に

ついで掘り下げた考察の作業に裏づけられたものであり、全体として論点が明快に整理された説得力のある論文となっている。

論者によるクワイン批判の要点は、その自然主義的認識論が、三人称的立場による哲学的分析のみを認め、一人称的立場による批判的検討を認めないところに限界をもつ、ということである。論者はこうした限界が、クワインにおいては、科学的探究をもって個々の人間の誕生以来の経験的刺激のインプットの過程のはてに「自然に」産出されるアウトプットである、とされているために、一人称的視点の必要性が関与する余地がないためであるとする。論者はクワインのこのような科学観をパースの科学観と対比し、後者においては、科学的探究が探求者の側での探求の共同体への自主的で意志的な参入の決断を必要とする、とされている点に注目し、ここから認識論の本来の役割である探求についての規範的な吟味の余地が生まれるとする。可謬主義的でありながら反自然主義に立つパースの認識論が、こうした科学観から生まれたとする論者の分析は独創的であり、しかも哲学的に有意義な洞察である。

本論はアメリカの代表的な哲学者二人の認識論について、きわめて包括的な検討を行った意欲的な業績である。ただし、パースとクワインとは同時に、今日の論理学の興隆のために多くの寄与をなした、歴史的に見ても最大級の論理学者でもあり、そうしたアプリアリな思考にかんする彼らの成果を加味して解釈したとき、その認識論の議論にはさらに複雑な形式的考察が関与することになる。本論は二人の哲学者のこの側面についてはほとんど触れるところがない。この点を今後の研究の深化によって、おぎなっていってもらいたいと期待する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年11月27日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。